

ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (形態編)

アジア英語 (*Open Asian*) を礎として

INTELLIGIOLOGY OF OPEN JAPANESE (Japanese English) A Special Reference to *Open Asian* (Asian Englishes)

末延 岑生 デザイン教育研究センター 非常勤講師・兵庫県立大学 名誉教授

Mineo SUENOBU Kobe Design University, Center for Design Studies, Lecturer, University of Hyogo,
Professor Emeritus

要旨

本稿では「ニホン英語(*Open Japanese*— OJ)」の形態論上の類型化を試みた。ニホン英語はこの一世紀の間に、日本人の手で従来の英米英語を日本文化・母語と照合させ、自由に取捨選択し変形しながら、現在ほぼすべての日本人が、好むと好まざるに拘らず使っている英語である。今回の類型化分析の過程から得られたニホン英語の特徴、アジア英語の特徴とは次の5つである。

(1)母語(踏襲)化によって英語の中に母語の伝統を復活させ、個性化することでニホン英語に誇りを持たせた。(2)英米英語を拡大解釈化することでことばの規制を緩和し、使いやすくした。(3)簡素化で無駄な飾りを取り払い、すっきりしたデザインにした。

(4)置き換え化でより理解を明快にした。(5)入念化で英語がより丁寧・親切化され、英語をよりユニバーサル・デザインに近づける言語へと磨き上げてきた。

ところが日本の英語教育界は「ニホン英語」を「誤文」とみなし、完璧なアメリカ英語以外を認めない。しかし、本稿で分析した誤文1,413文のうち、1,279の文(94.7%)が冠詞やsといった些細な規範文法のズレであり、推理すれば意味が取れることが判明した。これは筆者がすでに「ニホン英語は78%以上の高率で理解される」ことを実証した(Suenobu 1988)が、それを超える確率となった。

Summary

In Japan, an increasing number of books on ELT have been sold on the titles of “No Native-speakers of English Understand Your English” “Shame on Your Japanese English,” and so on. Petersen has long been issuing fatal warnings to us that if we say, “Last night I ate a chicken in the yard,” this makes the English imagine that Japanese people eat a whole chicken alive in the dark yard with blood dropping out of wicked mouth. Another writes: if we say, “I like dog,” they believe we like to eat dogs. In their books more than a half of the pages account for minute explanation of articles.

In fact, we have no words or rules in Japanese for substitution to English articles and ‘s’ like ‘He speaks’. It is true that readers believe that they are the peoples edgy about these petty things and that they are unaware of Asian culture.

The problem is that young readers have been afraid of speaking in English, and finally stopped using it. The “1,413 pieces of sentences” pointed out to be erroneous were classified morphologically and it was found that 94.7% of them were correct in terms of intelligiology. This paper deals with these problems

はじめに

本稿は日本人が現在国内外で使用している生の英語、すなわち「ニホン英語」（*Open Japanese* 以下 OJ）を分析し、その形態論的類型化、デザイン化を試みる。

現在英米で使われている英語は英米の「国語」だが、語彙の大半は歴史的には他言語からの借用である。しかし英米の3億人が使うこの方言としての英米英語が、今日まるで国際語であるかのように誤解される中、歴史上かつてないほどに汎化し、諸国に影響を及ぼしてきた。

日本を取り巻くアジア諸国ではこの英語を「取得語」として積極的に自国の文化・言語に照合させ、容赦なく取捨選択し、母語の中に自由に変形しながら取り入れ、世界に向けて使ってきた。現在世界では20億の英語人口の3分の1近くが、この「アジア英語」を使っており、東南アジア10か国で構成されるASEAN(東南アジア諸国連合)では1967年の設立以来、取り決めも不要のままに自然と「実質上の公用語」となり、国際関係の手段として機能している。たとえばインドネシアでは専門用語の80%が取得語彙だが、社会言語学的に見ればごく自然な現象である。

本稿で類型化する「ニホン英語(OJ)」も、従来の「英米英語」を日本文化と母語の日本語に或は順応させ或は積極的に咀嚼し、自由に変形させながら発展しつつある言語である。社会言語学的な見地に立てば、英米英語追従どころか、英語と日本語の良さがうまく混成され、日本文化に溶け込んでデザインされた貴重な作品であり、「ニホン英語」は世界の人々に開かれた *Open Japanese* つまり「日本人の第二の母語」として、また言語学用語で新たな語彙が加わる“*Open Class*”つまり「開いた類」という意味で創造された「世開語(*Open Language*)」へ向けての賜物である(末延1991)。

それに加え古代から中世、近代英語の歴史を紐解くと、たとえば16世紀には“Where wends(goの過去形にs) my beautiful Mary?”や“What think you(何と思う)~?” “This my book(この私の本) ~.”のような日本語の語順そっくりの文が使われる。英語民族の先祖の蘇り、「個体発生は系統発生を繰り返す」というE・ヘッケルの反復説(生物発生原則)がOJの中に見られ(Suenobu 2006)、英語の成立探索法の一つでもあり、けっして英米英語の未熟言語ではない。

ところが「英米英語」を唯一の規範とする文科省や英語関係者たちは「ニホン英語」「アジア英語」をあってはならない言語として無視し、その結果言語的にアジアで孤立している。しかし本稿で分析する1,413の「ニホン英語」の文(注1)、すなわち英文法学者や指南役者たちが誤文と断定し「英米英語」へと改善を迫る文のほとんどが冠詞の有無や“s”の付け忘れといった些細なもので、文脈から推理すれば常識的に理解でき、全体のうち1,279文(94.7%)が理解可能な文、直せてわかる文であることを突き止めた。

第1章 ニホン英語の類型化

世界には「アジア英語」をはじめ64種類以上の英語があり、装飾を凝らした「英米英語」の難解さに比べて、そのほとんどは理解しやすい洗練されたデザインを呈している。世界の英語人口20億人のうち、「アジア英語」の利用者はその3分の1近くを占め、中でも「ニホン英語」の理解率は文科省の推す「アメリカ英語」の55%(Smith 1979)に比して、79.2%,80%(Suenobu 1988,1999)、世界レベルでは75%(Smith 1979)と世界でも高理解率を保ってきた。

さて「ニホン英語」はどのようにして発達してきたか(Suenobu 1999)。「ニホン英語(OJ)」は従来の英米英語をもとに(1)日本文化・日本語の伝統を受け継いで「母語化」し(2)包容力、つまり受け入れの幅を広く「拡大解釈化」し(3)すっきり「簡素化」し(4)噛み砕いて分りやすく「置き換え化」し(5)親切で丁寧に「入念化」してきた。本稿はアジア英語等を織り込みつつその姿をデザインする。

ニホン英語(OJ)の類型化にあたっては、品詞別の形態的分類から始め、統語的類型化へと進む。OJとして文化的になじまない冠詞、三単現のs、抽象名詞、付加疑問は第2章にまとめ、その不要性を論じる。

1. 名詞

母語化: アドバイス、パフォーマンス、それにプロバイダー、アクセスのようなコンピューター英語に見られるような「カタカナ英語」で、すでに1万語以上を数える。小中学生でも2,3千語を知っているとされる。発音が忠実でないため多くの英文法・音声学者たちから猛攻撃を受けており、そのいくつか

は自然消滅するだろうが、その反面、じわじわと英語に溶け込む数の方が圧倒的に多く、すでにニホン英語の大きな底力となっていることはあまり気づかれていない。

拡大解釈化：意味の拡大解釈化、おおらか化は歴史的にも頻繁に行われてきた。しかしたとえば OJ の I saw a beautiful fall (→×) in Hakone. は、fall はアメリカ英語では(ナイアガラのように)一直線に落ちる滝を指すが、箱根にはそんな滝はないので使えないし、cascade は水の量が多く勢いのある流れでなければならぬという(レッドベター 2007 p.133-34)。結論は「日本にある滝のすべてに fall という単語は使えない」という。このような矮小化に対して「拡大解釈化」を筆者は「おおらか化」と呼ぶ。

簡素化：インドネシアでは televisi(→television)のように語尾の -sion, -tion はすべて -si で統一。

入念化：OJ・OA では、on the (→0) upstairs がある。

2. 代名詞：

古くから them books が使われ、18世紀まで this my book も使われた。OJ でも同様「この私の本」の語順そのままによく使われるが、英文法学者は即屑箱へ。

母語化：フィリピン英語はタガログ語の代名詞 siya は男女を指し、He is a nice girl. OC も同じ理由で This book is my (→mine). I have a brother and she (→he) is ~. 韓国英語は He (→His) name ~.

拡大解釈化：OJ では、It was him (→he). も、He is taller than I (→me). もどちらも通じる。

簡素化：フィリピン英語では、Did you enjoy (+yourself) last night? ((内が AmE を示し、+は必要性を示す) の、Enjoy! のようなあつけらかな所有代名詞 yourself の省略がみられる。OJ・OA として、I have a camera in (+my) hand. や、better than my one (→mine). がある。

置き換え化：アメリカ・インディアン英語では、Him (→He is) no good for me.

3. 形容詞：

OE (Old English) は屈折言語であったことから、名詞に付随する冠詞・形容詞は名詞の性別にあわせて屈折したが、ModE (Modern English) では屈折が消滅して現在に至る。英国では18世紀初頭まで good gooder goodest を使い、今は米方言だ。

教養人の話し言葉にも It was high, high (→very high). のように同じ語を重ねて使用する傾向が見られる。OJ・OJ では very very happy. となる。

拡大解釈化：OA は He is a small (→short) boy., She is much smaller (→younger) than me., You are bigger (→older) than me., She is a social (→sociable) woman., soft meat (→tender meat).

OJ では The price of oil is expensive (→high). Nv たちは Oil is expensive. ならいいが、the price of が付くと high 以外は使用禁止だが、OA では平気だ。He is six feet high (→tall). は典型的な OA で、世界中で通じる。OA では I am two years smaller (→younger) than you. で、bigger は older になる。OJ・OA 他 I drank much (→a lot of) beer. 肯定文で much がだめなら、「ありがとう」も言えない。OJ・OA の I have much money. はダメだが、否定や疑問では much は OK。

OJ の Children who can study in this school are happy (→lucky) は、AmE では「ある事柄や状況に関して、日本語で『幸せだ』というときは、happy ではなく、lucky や fortunate など『運がいい』という意味の単語を使」えという(レッドベター 2007 p.114)。自分たちはそうすればいい。

簡素化：OJ の He behaves friendly (→in a friendly manner). は指南役によるとアメリカ人には意味不明だという。だとすれば英語史の勉強が必要だ。

置き換え化：OJ では You do not play the game like (→as) I do. OA としても古くから定着している。OJ の He remained

silent(→silence). は、100%世界で通じるが、AmE では remain という動詞は米国と日本では「第3文型では使ってはいけない」という規則がまだあるが、kept silent なら許すという。OA ならどちらも許す。また OC・OJ に It is very difficulty (→difficult) to study English. It smelled badly (→bad).がある。フィチキデス(1989)が提示するこの種の誤文は22例中2文だった。

入念化：OJ, OI(Open India)の、She is homely (→domestic). は OA では家庭的な主婦だが domestic は animal を連想。さらに “He is more stronger (→stronger) than George.” や “more better” “too good” の表現は、OJ の学習者でも罰点だが、OA では定着している。また、OI(Open India)の “Come, Come”。OJ の If you want some tea, there is hot water (→water) in the pot.は、「アメリカではコーヒーや紅茶はホットで飲むのが普通ですから、ネイティブ・スピーカーはこうは言わない。」という(レッドベター 2007 p.28)。

ではネイティブ・スピーカーとは何か。八木が「私はもちろん、ある表現が可能かどうかはネイティブ・スピーカーがその表現法を日常的に使うかどうかで決まると考えています(八木 2007 p.13)」と指摘するように、日本の英文法学者はこの言葉に絶対的な信頼と敬意を表し、これをただ忠実に国民に伝えることを本業とする。八木はさらに“正しい英語とは何か”の項で、「インド英語は…インド以外の世界では通用しません。…シンガポールだけでしか通用しない英語では、世界的に有用な国にはなれない…。問題は韓国なまりの英語です…韓国でしか通用しない英語では、あまり意味がないでしょう(八木 2007 pp.16-17)」とデータもなく OA を切り捨て、「(日本の英語)教育は日本なまりの英語を目指すべきではありません。…それよりも、しっかりとした文法にかなった、英語らしい英語を(八木 2007 pp.17-18)」という。そのため日本は各所に10人以上のネイティブインフォーマントを常駐、最新のネイティブ英語を維持すべきと説く。

4-1. 動詞

歴史の中で多くの動詞が自動詞に、時には他動詞に逆転した。OE では自動詞が勝ったが逆転、その後は両用動詞・他動詞が

圧倒的だ。ME(Middle English)に英国を征服したノルマン貴族が、英語の無用な屈折語尾を捨て強勢のある第一音節の語幹を重視、簡素化を推進。多くの屈折は消滅した。この英断は OA・OJ に見られ、enjoy のように他動詞の自動詞化が著しい。

現在、標準英語とされる米北部英語でも、I clim (→climb) up the mountain yesterday.が今も大らかに使われ、米東部英語では I waked up.が大手を振る。また、ウェールズ英語は He do ～. He have ～.のように三単現でもそのまま。過剰訂正としてアメリカ英語には felled, frozed, threwed, strucked がある。

母語化：八品詞のうち動詞の頻度は英米語では 9.3%だが OJ は単文が多いため約2倍使う (Suenobu 1999)。フィリピン英語では、タガログ語の影響で come と go の区別がない。OI・シンガポール・フィリピン英語でも、I bring (→take) my child to church every Sunday. も方向を表す to があるからわかる。同じく、OI をはじめ OA でも Take (→bring)him here. またベトナム語には動詞の変化がないので、ベトナム英語ではすべての人称、数、時制、相に I go, He come のように現在形動詞を使う。

拡大解釈化：AmE では scold という動詞は、子どもを叱る時だけにしか使えないという難儀なことばだが、日本人アジアの人たちには、話し相手のことばを自分だけの尺度で理解したり悪意で解釈したりする習慣がなく、相手の身になって解釈する。だから OJ・OA では誰にも通用する便利な動詞となった。

また、形態上、不規則動詞の活用を無視して taught, swimed; more good, most good のように、-ed, more~, most ~ に標準化しようとする「標準化現象(Standardization)」がみられる。

OJ の stay も、live と同じように使われ、OI では I stay (→live) in India.が公用語として使われている。Send も、AmE のように、子どもを送り届ける以外に使えないが、OJ・OA では大人も送れる。OJ・OI では He called (→invited) me to dinner.,OA の He is learning (→studying) at London College. は、「勉強している」だと推理する。

OJ の Our dog Toby came to our house (→We got our dog

Toby) two years ago. は、指南役によると、「come という動詞はペットが『来る』には使えません」とある(レッドベター 2007 p.93)。これだと犬に指示する時も“Come”や“Go”さえも使えないと曲解する。コアラに会うのも meet はだめで、see. この複雑さを狙って入試問題の題材に。OA・OJ は人も動物も絵本の世界のように平等だ。OJ・シンガポール英語・マレーシア英語に I see (→watch) a television. がある。

OJ の I suggest you to (→that you) join us. があるが、AmE では suggest (提案する) の後は不定詞はだめで、that 節、しかも助動詞は should 以外は一切認めない。この複雑さ。10 も 20 もの交通信号の横断歩道の前に立つ気分だ。私たち日本人は I want to come, I intended to go to~, I propose to come. から類推して suggest にも使うのは自然だと思っている。

OJ の Please explain me~. の誤文も日本人が tell me ~, show me~. から類推するからいけない、と『Oxford 現代英英辞典』の解説書は日本人に警告する。私たちが英語を類推すること自体禁止で、“だまって真似ろ”を連想させる。解説書が日本の英文法学者に対し取締りの手ぬるさを叱責するのが哀れを誘う。

OJ・OA: Can I borrow your phone? AmE では以前“borrow は動かせないものを借りるわけにゆかない”という決まりがあった。OJ では風呂さえも borrow でユーモラスな表現だから、筆者がハワイにいたとき勇気を出してこれをよく使ったものだ。そうすると“お釣り”が来た。「OJ は面白い」と Non Native たちをはじめ英米人さえもが風呂にも電話にも部屋にも“May I borrow your room?”などを使い始めたからだ。実際はこうして突破口が開くと、ことばの拡大解釈は日本文化の理解を広めながら次々と進むのだろうと思う。こうして新しい文法が形成される。人間的ではないか。OC にも He accepted (→received) a good education~, I went to Peking and lived (→stayed) for ten days. がある。

さて、OJ の手紙文で“Hello Mr. Ledbetter. I enjoyed skiing last Sunday.” は典型的な OJ であり、れっきとした世界英語でもある。ところがこれは「奇妙」な誤文のようで、enjoy という動詞は「いきなり使ってはいけないという規則があるから」だという(レッドベター 2007 p.109)。状況判断からして冒頭に enjoy がある限り、この教え子からの英語の手紙文はあ

りえないのだそうだ。日本の子どもたちの英語学習は、こんな「ぼろ切れ」のような「アメリカ英語」の規則に無駄な時間をつぶす。“enjoy”を“楽しむ”どころか、怖がってしまう。

また OJ・OA その他では Wear(→Put on) your coat. の wear は状態動詞だからだめで、put on なら動作動詞だからいいという。だが OA のようにどちらにも使えたらもったいい。同様に OJ の This dress will match (→suit) her very well. Will you teach (→tell, show) me the way to the station? Teach は「知識や技能を教えること」だから日本とアメリカではだめ。OJ の We might be late. Let' s get on (→take) a taxi. は「利用」の意でだめ。アメリカ英語教育の実体だ。

次は有名な OJ の I' ve forgotten (→left) my umbrella in the bus. だ。物を置き忘れたときは forget でよいと覚えたのに、忘れた場所がわかってしまえば話が違うらしい。ここは in the bus があるので left。「忘れて」いたものがどこかを忘れていたはずの「忘れた場所」が明らかになったのだから、忘れたときのことは忘れて「残した」ことという理屈。

人を支配するコンピュータの小説があるが、文法学者が「アメリカ英語」というロボットをリモコンで独り歩きさせ、互いが絡まり人間を支配してしまった。

OJ・OA その他多くの人々が使う Everyone loves (→likes) polite people. もなぜかだめ。次の OJ の I want to lend (→borrow) a book from you. は貸借問題が生じると紛らわしいので誤文といわざるを得ないが、フィチキデスでのこの種の誤文とみなされた文は 31 例中これ 1 つであった。しかし、在日の英米人も「この本は〇〇さんから貸しました」のように日本語の「貸す・借る」を語頭が同じためよく混同するが、実際は私たち日本人は「から」で推理してあげている。

簡素化:

他動詞から自動詞への簡素化は、OA において大きな変化である。フィリピン英語、OJ では I enjoyed yesterday. Can you afford? Do you like? He didn't answer. などのように目的語を省略する。それで互いに理解できる。

置き換え化: OA では I'll friend you., シンガポール英語は I go marketing every Sunday., でわかるが Where do you market?

は紛らわしい。OI・シンガポール英語、OAはI(+have) pain in my back.だ。最近、同胞のアジアの人たちに「painは動詞だよ」とNvがましくおせっかいして失笑を買う日本人の姿をよく見かける。I tripped (→traveled) to Europe last year. これはtoもあるし、OAをはじめ世界で通用する。動詞の名詞化を阻止する多くの英文法学者は、tripだけだと「つまづく」の意だと忠告するが、そのためにヨーロッパまで行った人はいない。

入念化：OJのWe picked up (→0) flowers in the garden.は、upは地面から直接拾い上げる意味だから、その花の根がたとえ地面についているからといってもダメ。Nv英語のルールだからだ。OA・OJで誰もが使うI might fail in (→0) the exam.のfail inは「失敗する」の意なのに「試験」はfail examだった。

ほかにOC・OA・OJにHe reached to (→0) the city before dark. I resemble to (→0) my mother. I met with (→0) a friend of mine. I don't want to marry with (→0)him. I should like to do traveling (→ travel). I also want to do happy wedding (→ get happily married.). I didn't finished (→finish) He flied (→flew)to Kobe.

4-2 Be動詞：

ウェールズ英語では、We am~, You am~. また、Be I ~?, Be they ~? のようにbeをすべての人称に用いる。黒人英語には次のようなbeの省略が見られる。They (+are) in the room. She (+is) going. We (+are)hungry. He be (+always) tired. He (+be) going. Don't (+be) shy. でみんな通じる。

母語化・簡素化：OJ・韓国英語は母語の述部が形容詞も可能なためThey(+are) happy. I(+am)busy.

置き換え化：OJ：Tomorrow is (→we'll have) school. The German is (→ has) a controversial character. The poor man does (→is) not able to pay. はOJの典型で、ごちなさはあるが問題なく通用する。OI・OA・OJのSecurity Camera is

Working (→in Operation).では「稼働中」。米は「壊れていないよ」。

4-3 助動詞

OEでは現在の大抵の助動詞 shall, will, may, must, canは、I will her to meet me.(来させる)のように動詞として扱われた。イギリス英語ではI shall (またはwill) be 20 years old next month.一方、AmEではI will be 20 years old next month.となる。米南部の英語ではI might could~ (できるかもしれない)。また、I (+will) bring the thing soon.はll音の消失に伴ってwillも消失した。

拡大解釈化：OJではI could (→knew how to) swim. Canの過去は「方法を知る」の意だがOJ・OAでは文脈から善意に拡大解釈し定着。Nvも学習すべきだ。

OJ・OAではDo you must (→have to)work till 5 o'clock?, You will can (→be able to)visit NY.があるがmust, canで理解できる。

簡素化：OA・OJはI will appreciate it if you (→will) help me. OAは二度目のwillを省いて通用。

ちなみにhave toはI have some thing to say to you.のsome thingを簡素化して成立したものである。

置き換え化：OJのWe must (→have to) go to the office by 8.のmustは主観的な義務で、Have toは客観的な義務だが、I mustなら自分に義務をかぶせているのでそれでいい。You mustの時は強い命令に。

Do(→Would) you like another cup of tea? OC・OJ：Her face does (→is)not like her mother's. OC：How many sons you have (→do you have)?

入念化：OJのI will(→0)inform you that we have ~.は「これでは未来のいつか分からない時にinformしますという意味になってしまう」そうだ。I will (→0) apologize for the ~.も同じ。だが未来だからこそwillを丁寧に念押しするのがOJ・OAのやり方であり、現実的にinformしていることに対し

て、常識人ならそのような不信心は持たない。英語自体は何ら問題を持つことばではないが、こういう人たちが使うと、俄然、不信のぶっ掛けあいの趣を呈する。ことばは互いの譲り合いで成り立つから、Nv は「譲り合いのルール」をこそ知るべきだ。シンガポール英語は、Can you~? に対して Yes, I を省略しながらも Can, can. と繰り返す。Cannot (No, I can't) もある。

5. 副詞

母語化：ウェールズ英語の I can't do that, too (→either). は教養あるウェールズの人々の話し言葉だが日本ではバツ。each other, one another の用法は、現在のような“二者間、三者以上の間”という決まりはなかった。OJ の These two boys help one another (→each other). は日本では誤文。OJ: He was hit hardly (→hard). 「ひどく」は OJ の典型で世界中で理解される。その他フィリピン英語では go down (→from) the bus. OJ: It was so (→very) good to eat. OI: I am too (→very) happy. OJ・マレーシア英語: I ever met her before. ever は過去の動詞と一緒に使われる。OJ・OA: See you next time (→in the future).

OJ の Both (→Neither) of them did not (→0) go to school. は、部分否定との混乱が生じる点では誤文であろう。OC・OJ の I can speak Chinese except (→as well as) English. では、except は「英語以外に中国語も」「英語と同様中国語も」の意ですぐ慣れる。

さて OJ の What are you always (→usually) doing on Sunday? を聞いたピーターセンは「相手が何を聞こうとしているのかさっぱりわからなくて答えられなかった。それに、その英語には不気味なひびきがあった…それがわかってもその不気味さはすぐには消えなかった」(ピーターセン 2003 p.97) という。何が“不気味”かむしろ不気味だ。会話は互いの努力で成立する。ことばだけの世界に住む人はたえず「ことば武装」をし、自分も人も信じられなくなるという好例だ。日本人の口癖「いつもは何してる？」の「いつも」が時には always、時には usually になることは、ほんの 2-30 分も話している外国人なら、誰でも OJ の特徴としてわかる。その努力がこの人には微塵もない。

日本をはじめアジアの人々には、決して相手の言葉だけで判

断したり、自分だけの尺度で理解しようとしたり、逆手に取るという習慣が、幸いにも長い歴史の中でほとんど芽生えることはなかった。ましてや相手が我々の母語でもてなしてくれる場合、傲慢な社長と運転手の関係ではなく、最高の敬意と深い感謝を以って臨んできた。力づくで“統治化”を謀る大国が台頭する今世紀にも、OJ・OA は磨きをかけ、“世開語”(Open Language) としてことばによる世界平和に貢献する。

さらに彼は OJ・OI の「She is jogging every morning. や I am drinking beer every night. He is seeing a doctor for his headaches. という英語はない」(ピーターセン 2003 p.99) と断定するが、70 年代のワープロのように推理能力が貧弱で、自分の無知をさらけ出す。それだけではない。誇るべきヒンズー語から派生する OI の進行形の母語化を罵倒し、インドの文化、インド人の人格そのものを否定する陰湿な差別意識で満ちており、N・Nv 全体に対する蔑視につながる。

また「文頭に Especially (→In particular) という語がくる英語はない」(ピーターセン 2003 p.152) と断定するが、事実として筆者らの OJ による著書には頻りに現れ、理解される。人は自分の尺度に及ばない次元からものを見ると、現実存在するものでさえ、魔術のようにその「ことば」をなきものにする。これが「ことば」の持つ恐ろしさだ。この人には“WALKMAN”も容認されまい。私たちの先輩が築いた汗の結晶 OJ、OA に対しても、こうしてネイティブ・スピーカーとしての“真剣”をひけらかして振り回し、切り刻む。彼は正直に“そのような表現は私たち指南役の間では(まだ)知らない”といえればいい。

拡大解釈化：OJ の hopefully という副詞は、指南役は AmE では動詞句副詞としてしか使えず、「必ず希望にあふれたやり方で何かをしている人だけに言及する文」と規定する。だから、Hopefully, the treaty will pass, but it isn't likely. のような曖昧な文はないということになるが、筆者も含め日本人は何か夢をもたらしてくれそうなこの副詞が大好きでよく使い、希望の先行きの如何を問わず、益々拡大解釈の傾向は進んでいる。また、OC に、Although I studied as possible (→much) as I could. ~. がある。

簡素化：OJ: It is dirty, throw it (+away).

置き換え化: OJ: I am very(→quite) exhausted. Exhausted という非段階的形容詞の前には very は禁物という。同様に impossible, huge, excellent, terrible, true, unique, delicious. Delicious に very をつけてはいけないのなら、おいしさの感激をどこへ持ってゆけばいいのか。「めっちゃうまい」と言いたいのを、“Quite delicious.”「トツテモ美味ですわ」なんて、息苦しくって言えない。Here it is too (→very) hot in the summer. それでは「暑すぎる」はどういけばいいのか。OI では“too good”さえ使う。He is not so (→very) rich. は、OA として確立。OJ: Here it is too (→very) hot in the summer. インド英語(以下 OI)では“too good”さえ使う。

6. 前置詞:

「僕()朝()6時()起き()犬()連れ()散歩した。」のように、どの言語でも前置詞をはじめ機能語がなくてもわかる場合が多い。子どもはことばの推理力が鋭いので、「てにをは」を抜いて絵本を読んでやっても結構理解する。大学生に英字新聞の冠詞と前置詞を塗りつぶし、当てるゲームをすると案外よくできるのを学生たち自身が驚く。Nv なら、なおさらだ。

拡大解釈化: OA でも OJ でも、連結する動詞によって多くの前置詞が拡大解釈される。たとえば The cranes were observed by (→with) binoculars. の文では、ピーターセンは by だと“望遠鏡自身が見た”となるといい、また This report was written by (→on) a word processor. も“ワープロ自体が書いた”となるといい(ピーターセン 2003 pp.57-8)。だが、それこそこの世ではありえない。その論法でゆくなら talk by telephone も“電話自身が電話するのか”と思ってしまう。だがこれは「慣用句として自然な言い回し(下線は筆者)」(ピーターセン 2003 pp.57-8)で済みます。

それなら私たちも上記のような表現は日本人に合った慣用句として自然な言い回しだと言えればいい。だから、今後互いにそれぞれ独自の表現は、それぞれの言語文化に根差した慣用句だといって“おあいこ”にするべきであると筆者は提案する。

さらに彼は「たしかに英語の前置詞には、ややこしいところもある。しかし、それぞれの論理が始終一貫して応用されると

いう特徴(下線筆者)を利用すれば、英語表現を自分のものとすることができるだろう」と結論付ける(ピーターセン 2003 p.76)。あまりに無責任だ。仮に事実なら英語学、言語学の大発見だ。

また小池・佐藤は I go fishing in (→by) the sea. は、「和英辞典では in が正しいが、in だと多くのネイティブ・スピーカーが海の中で釣りをすると想像するから」と誤文と判定する(小池・佐藤 2008)。筆者が最も恐れるのはこうした「説明武装」で、学習途上者に勇気を失わせることだ。文科省や英語教育者たちはこんなに想像力の乏しいネイティブ・スピーカーをさえ納得させるような「アメリカ英語」を目指せと若者にいうのか。拡大解釈によるフィチキデスが示した同類の 66 例の誤文中、世界から誤解を受けると思われる文は 0 であった。

簡素化: 八品詞のうち前置詞の頻度は英米語では慣用句多用のため 14.9%だが OJ は 9.1% (Suenobu 1999)。OJ・OA では I shall write (+to) him. だが、I shall write him a letter. のように直接目的語(letter)が続く場合に限って前置詞は省略可能。OJ・OA はその必要なく、簡素化・省略される。例: Who is knocking (+on) the door? He pointed (+to, または at) the map. We have a meeting from 1:00 (+on). I have no house to live (+in). Which shop should I buy a camera (+from)? OJ: She was (+in) good spirits.。

置き換え化: ニューヨーク市では、He lives in (→on) King Street. のような表現が今も使われている。OJ でも、He has lived here since (→for) two years. 一般に期間を表す for は省略さえされることが多い。例: He's been here (+for) two days. He has been ill from (→since) last Friday. He is popular among (→with) his friends. I congratulate you for (→of) your success. related with (→to), warn about (→of) the danger, independent from (→of) her mother, I am a student of (→at) Kobe University. At は活動の場。

また、OA として superior than (→to) ~. も典型的な OJ だが、日本では入試の受験者選別の材料だ。

一方、石川(1994)が指摘するように、ビジネス英語とし

では確かに誤解を招く次のような OJ の文例には、真摯な態度で耳を傾けよう。We ordered the goods to (→from) the company. I deposited \$1000 in (→with) the bank. (in は建物に、with は法人に), a check of (→for) \$400., I bought it for \$100. for は「等価値交換」。高度なビジネス英語では未般化の OJ を使うまでには至らない。

入念化: AmE では to battle だけで敵と戦うの意だがイングラント英語や OJ・OA では to battle with (または against) the enemy. で念押し。以下は典型的な OJ・OA・カンボジア英語・ネパール英語の特徴だ。

We entered into (→0) the classroom. Please answer to (→0) my question. I want to marry with (→0) her. He entered into (→0) the meeting. request for, visit to investigate into, study about, discuss about, mention about, return back, I'd like to contact with (→0)him.

OJ の Don't let him to (→0) go. とか、I watched the boys to (→0) play hockey. のように、使役動詞や感覚動詞の後に to をつけて 5 点引き。受動態だと再び to が復活するのを忘れてまた 5 点引きで出題者の思う壺。英語教育はこんな魔物に憑りつかれ若者を弄ぶ。英語史では to の浮沈は時代の成り行きだ。

7. 接続詞

OJ では初学者は重文を好み、接続詞を多用する。

母語化 : OJ の My father and mother ~. を D.セインは「ヘン」という。正解は My mother and father~. 絶句。まさか本気とは思えない。クシャミの音まで真似させたアメリカ人がいたが、この人の本の中身には『ニッポン人のヘンな英語』は分析上 3%にも満たない。自己文化中心主義の貴重な、世界的に第一級の社会言語学的資料として歴史に名が刻まれよう。

入念化: シンガポール・マレーシア英語: I can not buy it, why because, I don't have money. OC: Although he is young, but (→0) he is ~. Because you are a Japanese teacher, so (→0) you can write ~.

第2章 英米英語のアペンディクス

アペンディクスとは「盲腸」「邪魔」「無駄」を意味する。英語を学ぶ際、日本人にとってほとんど無駄なもの、その学習のために二度と英語を学びたくなる原因となるもの。無駄の極致である「ネイティブ発音訓練」に加えて、それに負けないほどの「無駄」が日本の英語教育のほぼ半分近くを占めている。そんな無駄を集めて葬るのが本章だ。

他文化を無駄というつもりは決していないが、学習目標とするコミュニケーションとしてのことばの中身とは程遠い飾り物で、うるさく飛び交う小蠅のような物体。この章が必要なのは、こうした無駄が OJ・OA の学習者にとってどれほど大きな負担を与え、さらに有害か、その理由を述べているからだ。それでもというなら感覚で慣れるしかない。これにこだわる時間があれば、他の外国語が 3 つ以上は習得できる。

1. 冠詞 (かんむりことば) :

年中雪と氷の中で生活するイヌイットの人たちにとっては、「雪」は生活から決して離せない。日本人は単に「雪」というが、彼らの世界では数十の全く独立した範疇の名称がある。大家族制のインドやロシアでは「親戚」の類語が 100~300 もあり、彩色家には「白」も数十種ある。さて that にあたる「冠詞」の使い方は蒙古語「糞」にあたる用語の数と同じく 7 つ、この使い方の複雑さこそ英米文化に欠かせない。

さて、冠詞は日本人にどう映るか。荒っぽく言えば「あの、ほら、あれあれ、あの…それよ」と繰り返す落ち着かないしゃべり方。使い方には 7 つ。日本・アジア文化には無関係だが、英語話者間では微妙な違いがある。しいて必要なら冠詞は that でいいのだが、基本的には名詞の頭にその一つを 0.1 秒以内に発声しなくては「Nv をイライラさせる」。それは (1) a, (2) an (3) the (4) the+_s (5) 冠詞なしの単数形 (6) 複数形の s (7) 代用の所有代名詞 だ。

ルールといっても、気まぐれ、思いつき、例外だらけで、こじつけルールが多い。複雑すぎて筆者も若いうちに諦めていなかったら、数十年はかかっただろう。でも筆者はその分の時間で、3 か国語が少しはできた。

現にアジアはじめ世界の諸英語使用者は、Nv 発音と同様こ

んな「飾り」は無視する。なくても通じるし相手が勝手に補うか省略して解釈するからだ。これくらいは私たちの想像を絶する英語学習努力に対する、Nvたちのせめてもの協力、償いだ。ところが日本では英文法の著者や指南役の書物には冠詞が筆頭に現れ、最重要だと執拗に説いてきた。なぜか。その意図は？結論を急ぐ前に、冠詞発生の歴史を垣間見よう。Old English (以下 OE) は屈折言語であったため、他の品詞とともに冠詞は当然屈折変化した。たとえば名詞に付随する冠詞は名詞の性別にあわせて屈折した。しかし屈折は次第に消滅してゆく。

OEの冠詞は指示代名詞としても、「ほら」「あの」の類でthatの代わりに過ぎなかったが、多くの品詞の屈折が衰退して行く中、それを補うために冠詞が台頭し、sun, moonのような目に見える物質には定冠詞theをつけたがworld, earthにはなぜかつかなかった。

言語の名前では、特に威厳あると認める“ラテン語”には、16-7世紀になって初めてthe Latinのようにtheがつき、国名にも物質文明国“the America”のように“勲章”の代償として冠詞がついた。河にも特殊な河以外には付けなかったが、後期Middle Englishになると、友好国の河川にtheを冠するようになる。

そのうち病気にも称号“冠”がつくが風邪引き程度ではつかない。今はcatch a coldとかhave a headacheのように、aがないと5点も減点される重要項目だ。

このように定冠詞theは高貴な人の名前や建物に、その威厳を上乗せするために文字通り“冠”がかぶせられ、権威を象徴した。冠(かんむり)の分取り合いだ。西洋的で権威的で、他人を寄せ付けないよそよそしさ、それでいて人を誘う怪しさを助長する。茶華道の本家が称号を高価な値段で売ると似ている。

ことばは恐ろしい側面を持っている。やがて彼らは“the”そのものの中に威厳、権威が存在するように錯覚、最も懂れる貴重な“the”の威力にアジア人が無頓着なことが、ますます彼らをいらだたせ、その大切な“the”を我々が仮にも誤用するという、あってはならない現実こそ何にも増して許せないのだ。だから、「日本人」には昔からthe Japaneseと冠詞をつけるがそれは“個性のない一塊の”という足かせならぬ“頭かせ”としての「冠的蔑称」なのだ。だからThe (→0) Americans

are always like that.のような文は、アメリカ英語にはあってはならないのだ。一方、無冠詞はその逆に、親しみ、尊敬、愛情の形で使われてきたし、現今のネットの世界でも冠詞をはじめ、急速に英語の簡素化が実現している。このように母語であろうと外国語であろうと、ことばは自分の文化に照らし、必要に応じて簡素化したり添加するのが自然である。

不定冠詞an, aは元来oneの意味であり、one letter → an letterのように使われた。An six days, a twelve monthsのような表現はModEに生まれた。日本では減点の対象となるa fewとfewの違いも、18世紀までは肯定的意味を持っていた。ところが、そのうちにaの有無にさえ称号を出す人たちが現れた。He is a bishop.と数えられるようでは値打ちがないが、He is bishop.は、その上だ。それを競い合わせた。

ところで、“冠”詞文化は、日本はもちろんロシア、中国、韓国、スリランカ、その他アジア諸国にもない。ところが日本ではこの“冠”も国家が保護し、日本語の「謙譲語」とともにセンター試験、大学入試で若者たちを試す。

私たちは人に謙譲語を強制しない。同じように、母語・外国語を問わず教師・生徒を問わず、一人の人間として使いたくないことばは使わない自由が保障される一方、使いたいことばを使う自由は守り抜きたいと思う。ことばの未来を、ことばを通じて人々を幸せに導く努力を惜しまない人たちにこそ預けたい。

母語化・簡素化：スコットランドなどの地方では、冠詞の代わりに、必要なときは「代名詞冠詞」ともいえるLook at them birds. やLook at they animals.のような表現を、今も使う。冠詞のないOJ・OCでは当然、Do you play (+the) flute?だ。日本はもとより、アジアの多くの国の母語では、文化の違いから冠詞は必要ない。スリランカ英語も、母語タミル語、シンハラ語に冠詞がないため脱落する。冠詞簡素化は、世界の多くの英語に見られる現象だ。だからOA・OJのBirds are singing in (+the) trees. Don't make (+a) noise. You are fool (→a fool). I 've never seen as beautiful(+a) scene as this.は世界中誰でも判るから、英米人はアジア人の英語に納得し、必要なら自ら補って理解すれば解決する。

さてOJのThis lake is the (→0) deepest here.には形容詞の

最上級に指南役は the をつけてはいけないという。「ほかの湖と比較しているのではなく、同じ湖の中で一番深い地点はどこかを述べる。この場合、deepest の後ろには名詞を補うことはできないことから、the をつけない」と。そのこと自体は正しい。だがなぜ異常なまでに緻密に習得させるのか。

英語を通じて世界の人たちと理解し合うことを夢見るまじめな日本全国の若き英語学習者たちが、米国の高校生でも舌を巻き Nv さえ驚嘆する、日本ではすでに数千万冊にも及ぶであろう 600 頁を超える“大米英語文法書”とでも言えるこの種の『英文法書』と、日夜格闘・苦悩しているというこの現実から、英語教育に携わる者は決して片時も目を離すべきではない。

幾重にも蔦が絡み付いた険しいこのジャングルに、一度迷いこめば二度とは出られないこの種の大英文法書を前に、実直な感想を述べるなら、50 年にわたる筆者の英語教育の論文・著書執筆生活を顧みても、この分厚い大著の約半分近くは、ほとんど使ったことのない文型、そして一般のアメリカ人はおろか日本人、ましてや高校生にはどう考えても必要とは思えない 800 もの「専門用語」で埋め尽くされた文法規則で満ちている。これは『英文法の参考書』ではなく、『英文法・語法学者間の高度な専門書』だ。

ことばを研究する人間として、その規範を公にし、自分たちの社会の中である程度規制するのは自由だ。しかし最低限、してはならないことに手を染めてはいないか。米 MIT の若き言語学者 S.ピンカーは、「正しい英語」を握る辞書・文法書監修執筆者が人々を縛り、仲間外れからの“恐怖心”が規範英文法市場を支えてきたと断罪する(ピンカー 2001 p.212)。日本ではこの恐怖こそ入試問題そのものであり、その被害者は日本の将来を担う若者たちだ。

文科省の指導で今後、より正確な英米英語を目指すなら 1000~2000 頁でも足りない。ことばに対して抱く日本古来の大らかさを完全に失い「英語潔癖症」に陥った日本人がこのような書物を許した。ニホン英語が目標だと 100 頁、その半分でも十分だというのに。

それにひきかえ、日本の言語教育の歴史の中で、遣隋使、遣唐使の人たちは中国から難しい漢字を命がけでもちかえり、何としてでも日本人たちに流布させたいと考え、これを心やさしく大人から子どもまで、男女一人残らず民衆の手の届くとこ

ろに持たせ差し上げたいとの一心で「ひらかな」や「カタカナ」を、ついには「入れ物」として世界の音声学者を驚嘆させる用紙 1 枚の「五十音図」をもデザインしてくれた。

それから 1300 年を経た今も、そのまま私たち 3 歳から 100 歳まですべての日本人の、毎日朝から晩までみんなの手元にある。これが奇跡でなくて何だろう。

この奇跡を受け継ぎ、目標とするのはニホン英語(Open Japanese)であり、その世界版すなわち世界に誇るカタカナ英語を土台とする世間語(Open Language)の完成である。混沌とした今の英語教育にこの尊い精神を引き継ぐことで、日本のいや世界中の大人から子どもまでが手元に置いてどこでも使えるようなデザインの英語を後続のために、読者とともに盛り上げたい。

置き換え化: OJ・OC では He is a (→the) tallest boy. I missed the train because there was the (→an) accident. があり、OJ では Mix a (→the) sugar with the flours s (→flour). I spend my holidays in a (→the) country. 田舎というとき the を使う。

冠詞が 7 つの選択肢のうちどれにすればいいかわからない時、OJ ではよく代名詞を使うが、ピーターセン(2002 p.56)をはじめ多くの指南役者たちは I went with my (→one of my) friend. といえ大変なことになると警告する。My だと「友はたった一人しかいない」からだ。しかし 1 時間も喋れば文法がわかる。我々も外国人の日本語を補って聞くように、彼らも my だけで心のなかで one of my と補充して聞いている。人類の言語聴解には、本能的にこの機能が相手を思う心に内在するからだ(Suenobu 2006)。

入念化: OJ・OA は I go to the (→0) school. The (→0) cholera is a dreadful disease. だが、病名にはもともと冠詞が付いていたし、~in the (→0) future の冠詞も動揺的だという。そんな中でピーターセンは OJ の Last night I ate a (→0) chicken in the backyard. を指摘して、chicken に溜息かもしれない一瞬の「ア」がつくだけで、アメリカ人には「夜が更けて暗くなってきた裏庭で友達が血と羽だらけの口元に微笑を浮かべながら、ふくらんだ腹を満足そうに撫でている—このような生き生きとした情景が浮かんでくるのである」(ピーターセ

ン 2003 p.11) と脅す。だれがこんな残酷解釈をするか。事実ならアメリカ人は恥ずべき「揚げ足とり」だ。元来日本語には冠詞がないから *chicken* に冠詞をつけること自体、奇妙なことに見えるが、これは日本人がよく犯す *hyper-correction*(過度の訂正)によるものである。できる限り英米人の習慣に合わせて差し上げようという、相手を思わんばかりの涙ぐましい親切心の結果、こうした冠詞が添加されるのだ。日本語ならせいぜい「一羽」か「一匹」か程度の下らない話だが、英文法上ピーターセンの指摘は確かで、日本の読者はこの告発の重大さをすっかり信じ込んでしまうのだ。日本人の親切心が却ってあたりとなり、アメリカ人の感情を深く害してしまったという貴重な一例である。

前述のイヌイットの「雪」分類や、蒙古語には7種類の「糞」語があるという文化のように、英米では「にんにく」は必ずすり刻むので非可算、「玉ねぎ」は可算という。「玉ねぎも刻むではないか」との反論に「刻むと非可算になる」という。何とも理屈に合わない英米独自の料理法の文化的習慣ではある。ニワトリも玉ねぎと同じという算段だ。冗談ではない。食べ物の一つ一つにもこんな調子で英語にはまり込まないと一生ピーターセンに笑われる。たとえ日本人が英語の捕虜という身分であったとしても、ピーターセンの言う「自然な英語」のためにここまで英米文化を強要されるなら、軍法会議にかけられてもいいのかと言いたくなる。そんなことより日本を含めアジアの若者は今、英語だけでなくさらに5つも6つもの外国語が必要な時代の中にいることを肝に銘じるべきではないか。

確認するが、こんなことを真剣に覚えるのは自由だが、私たちは英米という特定の文化を学ぶために英語を学ぶのではない。英語という「道具語」で世界の人々と交わるためだ。それを混同するからピーターセンのような指南役が道を説く。

東南アジアの国々では、このアメリカ英語だけでなく文化さえも支配する傾向がやがて賛美となり、若者たちへの“強制”となる“危険性”があると警告する学者さえいる一方、日本はすでに英語が必修で入試で強制され、危険の真っただ中にある。賢明なアジア人、いや世界の人々は、「自然な英語」のために馬鹿げた時間を費やすのは無駄と知っている。

古い話になるが米の音声学者 K.パイクは、E.サピアとの共同研究を控えメキシコ原住民の言語研究に没頭中、彼ら独特の

用語体系を見つけその思い出を私信(1989)でよこしてくれた。彼は文化を理解し合うことは大切だがそれを押し付けることとは別だといった。

かつて E.ホール (Hall, E.T.1979) は世界中の民族を調査、人のことばの端々を揶揄する「最も低俗な文脈文化」を持つアメリカ人と、世界で最も人の心を大切にすることば以上に高度で深い文脈文化を持つ日本人を浮き彫り対比したが、ピーターセンの著書はいみじくもそれをあらためて証明することとなった。

今や“ピーターセンチキン”と恐れる(畏れる信奉者もいるが)この文は、日本中に知られた「脅し文」だが、「食べる」とき以外大抵 *a chicken* なのに、学習者は「*a* のついた *chicken* は残酷」と記憶する。これに悪乗りして *I like dog* (→*dogs*) の本が出ると、“犬を食べる日本人”を恐れて「*a* のない *dog* も残酷」と怖がる。動詞のすり替えトリックで人を混沌のどん底に誘う卑劣さ。「善意の罪」「不作為」とはいえ現実では入試で試される。

Prof. of Low と書かれた名刺を見ても筆者は *Law* だとすぐわかるしそれを笑わない。しかし判っていないながら判らないふりをして攻め込む者は絶対許せない。かつて D.ラミスは言った。日本人が人格も人間性にも欠けたアメリカ人から英語を学ぶ結果、得るのは劣等感だけ、と。日本で人間本来の生き方を学ぶがいい。

同じく OJ によく見られるのは *I like to sing a song* (→0) だ。指南役は「みょうに聞こえ、変な感覚は残り…いつも一つの歌ばかり歌っている…幼児」と、とんでもない日本人観を露呈する(レッドベター 2007 pp.106-7)。 *I like to read a book* (→0) も本を一冊しか読まない日本国民と見下げる。読者には英語の名詞には“地雷”が埋まっている。OA・OJ の話者は“*a*”ひとつに誹謗し合わない。我が国の文化習慣はこうして“ネイティブ英語”に操られるまま、親子四代も押し付けられてきた。

さて、筆者が以前から指摘してきた「直せる文は本来間違いないではない(Suenobu 1991)」という仮説を証明するひとつに、ピーターセン自身の説明がある。彼は日本人の冠詞の誤りの実態を調査するために、英文学雑誌から 66 の冠詞の間違いを見つけ出した。そのうち 24 は *the* が余分、7 は *the* が不足、6

は a が不足、完璧は 28、残る一つだけが判断不能であったという。その結果 66 の誤文のうち「判断不能」は 1 つ、残り 37 文は本人自身が直せたという（ピーターセン 2003 p.26）。直せばわかる文は誤文ではない。

筆者はさらに本論文で使用した参考文献の著書に現れる“誤文”とされる 1,413 の文に目を通したが、そのうち 1,279 文（94.7%）が「直せる英語」つまり、理解できる文であった。

^(注1) これは筆者がすでに「ニホン英語は 78%以上の高率で理解される(Suenobu 1988)」ことを実証したが、今回の調査では 94.7%という高い理解率を得た。

会話とはシーソー・ゲームで、釣り合うには互いが重さの加減をする。日本人は通常アメリカ人と日本語で話すとき、その釣り合い具合が水平になるための両者の歩み寄りの度合いを示す「コミュニケーション率(Suenobu 1999)」は、日本人が 7 も歩み寄るのに対して英米人は 3 くらいの比率になっている。場合によってはさらには 9 : 1 くらいに歩み寄るときもある。これは英米人が日本語を一旦母語の文法に直して理解し、発言にかかる時間とその能力の限界をこちらが融通し理解して上げているからだ。だからこそ英米人も日本人と英語を話すとき、そうあって当然だ。

教室でも、教師と学習者のコミュニケーション比率はこうあるべきだと筆者は提唱してきた(Suenobu 1999)。冠詞や s のような、直せば理解できる些細な誤文をわざわざ指摘することは時間の無駄であって、たとえ相手が学習者といえども無礼だ。それより学習者のできる部分を誉めるよう全国の英語の先生方をお願いしたい。

最後に、彼によると「彼は足が痛いと言っている」の英訳を、片脚か両脚かが明白でないと英訳できないと暴露する（ピーターセン 2002 p.50）。自ら生んだ冠詞という厄介な負の遺産に執着するあまり文化的歩み寄りを拒絶、ついには歩けなくなる不合理を自ら作り出す。カブト虫がムカデに言った。「たくさん足があってすごい。」自分の偉大さに気付いたとたん、ムカデの足は絡まった。

2. 三単現の s

インドネシア語・中国語など、動詞に活用がないために起こる If he want(→wants) to ～. He go (→goes)to school.は、

OA・OJ の典型でもある。

日本人なら誰でも聞き覚えのあるこの「三単現の s」は、どんな歴史を持ち、どれだけの重要性があるのか。そして今、英語国民はどう使っているのか。

イギリス北部英語の単なる「方言の語尾につく符牒」（「彼の時だけには一時はやった「ノリピー」ならぬ「彼ピー」のような語尾程度の他愛ない符牒をつけたようなものか）として誰かが“発明”し、それが流行、14 世紀ごろには三人称だけでなく、さらにキザッぽく二人称のときにさえ s をつけてカッコよく喋るような人もいたようだ。

以後この流行には th が加わったが、若者たちが好んで使う s が残り(th は has, does に名残)、15 世紀末ロンドンで定着、現存するが意味上 99%不要だ。

そしてこのカッコいい代物は現在、イギリスのイングランド北部の地方では、I likes(→like) it.のように一人称の単数の動詞にも s がつくかと思えば、イーストアングリア地方では He like(→likes) it.のようにつかない。AmE、主に黒人の間では、He play (→plays) tennis. He live (→lives)in New York. No, he don't (→doesn't).と三単現の s,es は消失した。

でも、実はこの“s”こそが日本のエリート英文法学者達の見せ場だ。表面は英米留学を果たした「現代版遣唐使」よろしく中身とは裏腹に「この s をつけないと、米国の社交界に入れないよ」と選民的プロパガンダを撒き、the や a や s は中心的な存在となった。

600 年以上も前にイギリスの片田舎で遊び半分に流行したのであろうこの“のりピーことば”は、こうしてこの 21 世紀になっても日本の 30 万人もの英語教師たちが、それを手玉にとって弄（もてあそ）んでいる。こんな s と a と the を教室や入試で強調するあまり、3000 万人の日本の若い学習者は“慢性盲腸炎”で腫れて苦しみ、英語嫌いの最大の原因となっている。

30 年近く日本の英語教育に携わってきたという P.ミルワードは「単数の主語は単数の動詞と、複数の主語は複数の動詞と呼応する。これをごっちゃにはいけない、と再三にわたり言ってきたがすべて無駄だった。学生たちは私が何度これを繰り返そうと、聞く耳を持たない」（ミルワード 1986 p.182）と叱責する。文型練習なしで“三単現に s がつく”と文法規則を千回唱えても意味がない。

さらに文型練習を「ミシガン・メソッドという…意味のないこの教授法が日本の学校の英語教育として今も用いられているが、…このやり方が間違いだというのは、言語の目的はただしやべればいいというものではなく、…英文法」（ミルワード 1986 pp.190-91）こそ重要と説きながら、イギリスの子どもは雄弁と朗読の訓練をしっかり受け日本人は沈黙の訓練を受ける、と皮肉る。そして「全体として惨めな精神分裂—文裂の様相を呈している。」（ミルワード 1986 p.96）「…（そのためには）言葉だけでなく自分の考え方そのものも、日本語風から英語風に広げる必要がある」（ミルワード 1986 pp.190-91）と結論づける。

英米の国家や教育省が圧力をかけて英米英語を強制するわけでもないにもかかわらず、何としても日本人の考え方そのものを英語風に変えようとする文科省と、すでに考え方で英語風が変わってしまった日本の英文法・語法学者たちは、言語学習に最も必要な“実習”を軽視するこのような無謀なネイティブのことに疑問さえ持たない。筆者の場合は授業の70%を文型練習一筋にやってきた。

3. 単複名詞、抽象名詞

「何杯？中ジョッキ・ハーフはいくら？何ミリ？」

ビールを飲みながら、こんなことが気になる人には、可非可算なしでは済ませられないようだ。英語の初期のころ、海賊たちが分捕り品を分けるとき、この区別がなければ殺し合いにもなったろう。1980年代に筆者がイギリスで仕入れた情報だが、イギリスのパブでは、生ビールの泡は2.5cm以下という法律があるようだ。客との争いが絶えなかったからだ。蒙古語の「糞」分類のように、英米ではにんにくは非可算、玉ねぎは可算だ。英米のシェフになるならともかく、こんな一つ一つの野菜の違いまでを日本人に覚えさせるとすれば、いじめを通り越した拷問にはほかならない。

小野・伊藤(1993)によると、OEでは、two year, five monthのように、複数形をとらなかった。FishはfishesでModEまで残り、every one, every bodyは複数形として18世紀まで続いた。Moneyは16-7世紀には複数形をとり、monies, moneysが使われ、シェクスピアの「ベニスの商人」の原文には頻繁に現れるところがおもしろい。some, anyは18世紀まで単数形

が続いた。

母語化：日本語には原則として複数形はない。セイン.Dによると、Would you like some fruits (→fruit)? といえば大食いの象と間違われ、I have a lot of works (→work)は芸術品や工場の持主となる。Water and food is (→are) important now. は物質名詞だが主語が2つ…引っかけ問題だ（小池・佐藤2008）。

拡大解釈化：Brush your tooth (→teeth) before you go to bed., She has a long black hair. では、アメリカ人は日本人が歯を一本しか磨かず、長髪が一本だけと理解するから間違いだという。Do you have any idea (→ideas)? 一般に複数のアイデアを求めべき。次は、I'll change my train (→trains) 乗り換えるには電車は二台いるから。もう一つ。買うときはいるが、身につけるといらぬものは？Who is that man wearing a pair of (→0) glasses?

置き換え化：OJ・OAでは、I prefer white wine to red one (→wine). 物質名詞はoneはだめ。日本ではこれで早や5点減点だ。この恐怖心が数十万の完璧主義英文法・語法教師と600頁もの文法書をはびこらせる。

OJ・OA: He gave me some good advices (→advice). 逆にBilliard (→Billiards) is a very difficult game., Please tell me about your experiences (→experience). 経験話をせがんでいられるから単数に。Information, damage, design, furniture, luggage, fruit などを見ると緊張が走るのは筆者だけか。Water and food is (→are) important for us now. たしかに二種類。次のOJのEnglish are (→is) easier than German. は日本人ならeasierでEnglishがすぐ“言語”だと察しがつくが誤文。フィチキデスでの調査では、単・複の誤文37例中、誤文らしき文はこの1例だけであった（フィチキデス1989）。

4. 付加疑問

日本語なら「ね？」英語は70種。無駄の極致だ。No? Right? でいい。「統語の類型化」で詳述する。

以上の無駄のほかに「ネイティブ発音訓練」という最大級の

無駄があるが、これについては稿を改める。

第3章 結語

以上検証してきた全1,413の英文のうち、日本の英文法・語法学者や教師、それに英米の指南役たちが“誤用”と認定した1,279(94.7%)の英文は、日本人が誠心誠意発話し、あるいは書いたものであって、ほとんどの場合、些細な冠詞、三単現のsの有無、それに可算非可算名詞、抽象名詞など、コミュニケーションを維持するためには取るに足らない誤りであった。

このことは、日本の人々が従来使ってきた英語のほとんどは、英語教師のみならず英語が少しでもできる世界中の人々、英語を使う人間なら誰でも理解できる文、あるいは理解すべき文であったといえる。

従来文科省をはじめ英文法学者や教師たちが、日本人の使う「ニホン英語」をまるで悪性腫瘍のごときあつてはならない誤文だと長い間に渡って指摘し罰点を与えてきた。そこで筆者はその健康状態を調べてその病巣を探したが、その結果、内臓も健全で、見つかったのはせいぜいホクロ数個だったということになる。だからと言って日本の英語教育に病巣がないというのではない。どこかに病巣があるからこそ問題になってきたはずである。ではその病巣はどこにあるのか。

だがあらゆるOJがOJとして認められているわけではない。学習途上に起こる意味不明な誤文もあり、その上限・下限は未知数のものもある。本来会話理解率の度合いは両者五分五分であるべきだが、NvとN・Nvの間ならその責任は9対1もあっていい。

繰り返すが、日本の英文法・語法学者や指南役が、専門家の間だけで厳密な規範を設けて従わせ、違反者を罰しようとそれは自由だ。しかし英語の世界情勢も知らずデータも出せず、学習者に「ニホン英語はネイティブには通じない」と虚言して英米英語を強制することは学問的どころか道義的に絶対に許せることではない。OAやOJのように、すでに定着している世界英語の語法を英米人の価値観と尺度だけから判断し、誤文だと脅すことは学習者に自信を失わせる姑息且つ最も卑劣で危険な教育手段だ。

言語学者J.イーモンズは「(文法・語法学者や) 指南役が私たちにしゃべらせようとしている言語は、英語ではないだけで

なく人間の言語でありえない！」と叱責する(ペンカー 2001より抜粋)。ぼちぼちと病巣が見えてきた。今こそ「ニホン英語(Open Japanese)」を通じて人間のことばを取り戻そうではないか。

実は世界一難解といわれる日本語でさえも英語と同様、国語学者がその難解さを作り出していることがわかる。推理さえすれば理解できる動詞や品詞の屈折語尾や助詞の省略、数え方、些細な文法的間違い、敬語などを許し合えば、日本語は語順の面からも世界一易しい言語に変身する。

本稿で筆者はニホン英語(OJ)が母語と日本文化それにアジア文化を土台にして、英米英語を超えて力強くデザインされてゆく様子を描いた。つまり(1)母語化によって英語の中に母語の伝統を復活させ、個性化することで親しみ易くし、(2)拡大解釈化することで、凍りついて尖ったことばの規制を緩和して包容力を増し、誰もが使いやすいようにし、あるいは(3)簡素化によって無駄な飾りを取り払い、すっきりしたデザインに。他方(4)置き換え化することでより理解を明快にし(5)入念化することで英語がより丁寧化され、誰もが使いやすいユニバーサル・デザイン化された言語へと磨き上げられて行く様子を描いた。

以上のようなデザインによって「ニホン英語」の構築にさらなる磨きをかけ、日本の英語教育に少しでも突破口のための小さな風穴を開けることができ、英語学習に苦しむ若者に勇気を与えることができれば、と筆者は切望する。

さて最大の問題は以上のようなOJを、現場の教師はどのように評価するかだ。病巣を撲滅できるか、それともさらに広げてしまうかは、現場の教師たちにかかっていると筆者は思う。インドの言語教育者たちは、最初の授業で規範の発音と英文法をとりあえずは一通りで教えるが、次からは個人の人権を考慮して、それについては決して追及しないという(本名2002 p.85他)。ニホン英語を成功に導く鍵はここにあると筆者は考える。

たとえば、せめて初学者には第2章のアペンディクスに見られるような些細な誤文は見逃してあげてほしい。基本的に万人は、言うべきことを言い、その逆の権利をも持っている。たとえばOA・OJでは、冠詞、三単現や複数形のs、など自文化にはなじまないものも学校文法で一通り学習はするが、省略す

るのは未熟だからではない。外国語であろうと母語であろうと、人は自分の文化に照らしながら、必要に応じて簡素化したり添加するのがごく自然な現象だからだ。

しかし学習者のこうした些細な間違いにも、生真面目で潔癖症の日本の教師にとっては、わざと見過ごすことが一番苦しいものだ。ことばは寛容だから聞き直し、言い直せばいい。それをただ一回と思い、許せない、逃せないという正義(?)感、たえず完璧であろうとする”潔癖感”が底辺に鎮座する。これこそが病巣を広げ、指南役者や英語語法学者をはびこらせ、600頁の『バケモノ英文法書』と2000頁の『英和辞典』計2kgのお荷物を毎日若者に必携させる原因となっている。

日本は敗戦後67年、今も英米英語の呪縛の中で発音と文法を異常なまでの完璧に真似させ、3,000万の純真な学習者を国家レベルで巻き込み、もがき苦しめている。一方、英米文法学者たちは言語の科学的実証的研究をと言いつつデータ一つ生み出せず、無礼にも同じアジア人なのに世界最高の理解率を誇るニホン英語をはじめ、アジア英語は通用しないと切り捨て、理解率が世界最低のアメリカ英語こそ模範英語と断言する。

これは関西弁の教師が鹿児島弁や秋田弁を通用しないと罵り、我が訛りの疎ましさに失望して東京弁に憧れる姿と二重写しになる。こうして学生たちもOAやOJを軽蔑、選民意識を助長し、やがてそこからまたそうした思想の英語教師が生まれている。

ちなみに筆者の3回の検証では、日本人公立大学生のアメリカ英語理解率は10.23%(Suenobu 1986)、27%(Suenobu 1999)、世界レベルでは55%(Smith 1979)であった(なぜ通じないかは一連のSuenobu 1976-2011参照)。一方ニホン英語のアメリカ人理解率は79.2%(Suenobu 1988)、81%(Suenobu 1999)、それに今回の本論文では94.7%(Suenobu 2012)、それに世界レベルでは75%(Smith 1979)の高理解率を示した。

本稿を通じて世界、中でも日本をはじめアジア諸国の人々が、英米語を乗り越えて各文化の中でいかに大局的で個性的な英語を生み出しているかを明らかにした。今、日本の英語教育が挑戦すべきことは、(1)社会言語学を基盤とした国家による英語教育の目的意識の覚醒と、(2)ニホン英語・アジア英語の研究を深め、(3)現場の英語教師、学習者たちの自らの「英米英語依存症・潔癖症」と決別、(4)その分他の2~3のアジア言語

の学習のために時間を空けることだ。

以上、ニホン英語の形態論的類型化を試みた。機会があれば統語的類型化、音声学的類型化も論じたい。

(注1)本稿で分析したニホン英語文は、参考文献を含む十数冊の中から誤文とされる1,413文を抽出したものである。個別の詳細な分類分析はT.J フィチキデスの500文による。誤文の判断基準については過去Suenobu論文基準に準拠した。

参考文献

- フィチキデス,T.J,『英語コモンミス500』、北星堂、1989
 Hall, E.T *Beyond Culture*, NY Doubleday ,1976
 本名信行編、『アジア英語辞典』、三省堂、2002
 石山輝夫、『英語のミス』、The Japan Times、1994
 石黒昭博監修、『総合英語 Forest』、桐原書店、2005
 西村肇、『サバイバル英語のすすめ』、ちくま、1996
 小池・佐藤、『Nv 英語の常識175』、ソフトバンク、2008
 小野捷・伊藤弘之、『近代英語の発達』、英潮社、1993
 ミルワード,P、『英語の語法診断』、南雲堂、1986
 ピーターセン,M、『日本人の英語』、岩波新書、2003
 —— 『続日本人の英語』、岩波新書、2002
 Pike, Kenneth 私信(1989)より。(Suenobu 2002 所収)
 ピンカー,S、『言語を生み出す本能(下)』、日本放送出版協会、2001
 レッドバナー、『その英語ワカリマセン』、小学館、2007
 セイン,D、『ニッポン人のヘンな英語』、日本文芸社、2005
 Smith, L. “English for Cross-cultural Communication, *TESOL QUARTERLY*13:3 1979
 末延岑生他、「日本人の英語」、『人文論集』、KUC31-1 1995
 末延岑生、『ニホン英語は世界で通じる』、平凡社新書、2010
 —— 「ニホン英語(*Open Japanese*)をデザインする」、『芸術工学』、神戸芸術工科大学、2011
 —— 「ニホン英語」、本名信行、『アジアの英語』、くろしお出版、1991
 Suenobu, Mineo et.al Listening Comprehension and the PIA Non-N. *Int'l Review of Applied Linguistics (IRAL)* 34:3 Heidelberg 1986
 ——An Experimental Study of IJE *IRAL* 1992
 ——Information Transmission *IRAL* 35:3 1997
 Suenobu, Mineo *Errorology in English*, 740 pp. (bind copy), Yugetsu Shobo Kobe,2002.11.
 ——*From Error To Intelligibility*, Shubun International, Tokyo.199 pp.1988.8.
 ——*Communicability within Errors*, KUC Monograph LII, IE Research, KUC, Kobe.1995
 —— *Japanese English*, KUC Monograph LX, 1999
 —— *Pathology of English Teaching in Japan*, KUC Monograph LXVIII, KUC 226pp. 2003.3.

—*The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH

Monograph LXXVI, UH, 230pp. 2006.3.

八木克正、『世界に通用しない英語』、開拓社、2007